

佐々木教悟著

インド・東南アジア仏教研究 I

『戒律と僧伽』

本学名誉教授・佐々木教悟先生の『インド・東南アジア仏教研究 I「戒律と僧伽」』が出版された。これは著者の論文集とも言えるものであるが、単に既発表の論稿を集めただけでなく、幾つかの補筆と書き下ろしを加えて一冊の書となるようにまとめられている。

これまでの仏教研究において戒律を取扱ったものは少なくない。しかしその多くは仏教史の一面面あるいは一資料として取扱ったものであり、仏教における戒律そのものを本格的に研究対象としたものは少ないように思われる。そのような中で、長年に亘ってインド・東南アジアの仏教の戒律を中心に据えて研究を続けてこられた著者の業績が一書にまとめられたことは非常に意義深いものがある。

著者は「はしがき」において仏教に対する自らの基本的な学的態度を表明しておられる。それによれば、これまでの仏教の研究はそれぞれの部門で長足の進歩をとげたが、仏教本来の使命を果たすことに直ちに役立っているかどうか、と疑問を投げかけられる。そして今日の仏教教団や仏教徒個人のかかえる問題に答えるためには、先ず積尊成道の原点に立返って、仏弟子の集りである僧伽がどのような在り方をしたのがそれぞれの時代の中で学問的に可能な限り正確に跡づけられる必要がある、その場合最も

重要なことは、仏教の僧伽を支えていたものは積尊所説の法と戒であり、律であるということである、とされる。ここに戒律と僧伽に対する著者の基本的な捉え方が示されている。

ところで、戒律は三学（戒・定・慧）や三蔵（経・律・論）の一項目とされ、仏教では重要なものであることは言を俟たない。それは仏教徒の生活（実践）を本来の目的（悟りを証得するための修行）に適ったものとなるように具体的に規定するものであり、特に出家者に対しては僧伽での集団生活を配慮して規定したものである。従って、戒律は出家・在家を問わず最も具体的に仏教徒たることを明示するものとなる。しかしこのことは意外と自覚されておらず、また、戒律の本来の意義やその個々の内容もこれまで必ずしも十分に明らかにされているとは言えなかった。そして、特に出家者の戒律は僧伽の生活と不可分なものであるから、僧伽の意義が正しく理解されないと戒律そのものの意義も正しく理解されないことになる。このような課題に対して本書は十分な回答を与えるものとなっている。しかもその論述は、著者がタイに留学されて実際に僧院で二年余り出家生活を体験されたことに裏付けられているため、非常に明快で判り易いものである。以下に本書の概要を紹介しておく。

第一章「律蔵の有する意義」は二つの面から考察されている。一つは仏伝としての律蔵の意義である。周知の如く、律蔵は仏伝と呼び得るものを含んでいる。そしてこの仏伝の中には積尊の成道についての叙述の最も原初的な姿が見られるが、その中で特に積尊の見出した道は不死・甘露の道であること、梵天勸神、三人の迦葉を神変によって帰依させたいわゆるウルヴェーラの神変、の三点が目玉されている。もう一つは、律の学処制定の十句義の

中、正法久住あるいは梵行久住に注目され、これこそが戒律の本来の意義であるとされる。梵行は出家者にとって不可欠なものであり、正法久住の要件である。そしてその梵行を修するためには戒律は欠くことのできないものであり、それは正法の生命ともいふべきものであると述べられる。

第二章「僧伽を莊嚴するもの」は僧伽の本質についての考察である。僧伽は清淨と和合を本質とする。清淨とは戒律を守ることであるから、僧伽とは、それぞれが戒律を守り心を合わせ力を合わせて修道にいそしみ解脱を得んとする共同体であるといえる。そしてこの僧伽を有効に機能させるために布薩や自恣の行事がある。また、僧伽は四衆（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）によって莊嚴されるといわれるが、この莊嚴とは清淨を意味する。従ってこのことは、出家・在家が互いに支持し合って正法を実践することを示している、と述べられる。

第三章「上座部仏教の基盤」では、上座部仏教は初期仏教の精神と伝統を受けて、受戒と布薩を最も重視していることが明らかにされる。上座部仏教は比丘僧伽を中心としたものであるが、この比丘僧伽の形成・維持に不可欠なのが受戒と布薩なのである。そしてその場合、僧伽の結界（境界を定めること）が重要な意味を有していることが指摘される。

第四章「根本説一切有部の仏教」は現存の根本有部の資料（そ

れは律に關係したものが多し）を基にして、その部派の特徴を考察したものである。この場合、主要資料は『根本有部律』であるが、これには梵文の他に藏・漢訳が現存している。チベットに伝えられた律が根本有部の系統であることは知られているが、これまではチベット資料は看過されがちであった。その中で著者がチベット資料に注目され、それらを活用されていることは特筆すべきことである。根本有部の特徴として、讀仏乘の影響を受けた三宝崇敬、『三啓経』の誦誦などが指摘され、大乘との関わりがあったことが示される。

第五・六章は義淨の『南海寄帰伝』の研究である。その中、第五章では飲光（慈雲尊者）の『南海寄帰伝科』の科文（この科文は付録として巻末に収められている）に基づいて当該テキストの序文の内容が解説され、第六章ではその本文の四十項目の内容が明快に解説されており、当該テキストの好個の解説書となっている。ただ筆者の如き初学の徒にとっては、これの原本である安居講本に存した「義淨の生涯と寄帰伝」が本書では割愛されていることが残念でならない。

今後、第二巻「上座部仏教」、第三巻「インド仏教」が続刊され、全三巻となることが予定されている。それらが待たれるところである。

（兵藤一夫）

（A5版・三四一頁＋21頁・平楽寺書店・昭和60年4月刊・八五〇〇円）